

<研究ノート>駐日公使ハリー・S・パークスの墓

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

44

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

199

(終了ページ / End Page)

220

(発行年 / Year)

1998-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006966>

駐日公使ハリリー・S・パークスの墓

宮 永 孝

ウォルソルはイギリス中部、スタッフォードシャー州南部の都市である。パーミンガムの北西十六キロにあり、今日の人口は約十八万である。

この市は、馬具・皮革・化学・鉄・機械製品などを製することで知られている。そこからさらに五キロほど北にむかうと、ブロックスウィッチという村がある。

そこはイギリスのどこにも見られるような村で、別に見るべきものはない。平らな草地や畑のなかに、農家が見えかくれしている。また速くには起伏する丘陵がみられる。

R・オルコック卿(一八〇九〜九七、イギリスの外交官)のあとを襲って、第二代目の駐日特命全權公使兼総領事に就任したハリリー・スミス・パークス(一八二八〜八五)は、一八二八年二月二十四日ブロックスウィッチ村のパークルズ・ホールで生れた。

かれの祖父ジョン・パークスは、スタッフォードシャー州とウースターシャー州の境、ヘイルズオウエンで牧師をやっていた。息子がふたりいた。

長男のジョンはのちに海軍士官となり、次男のハリーは銀行勤務を経て、鉄工場（パークス・オートウェイ社）経営者となった。これが来日したパークスの父である。

ハリーその人は、活発で独立独歩のひとであつたらしい。かれはブリッジノースの郵便局長と書籍・文具商を兼ねていたジョージ・ギイトンの娘をもらい、やがて子供が三人うまれた。

パークスはいちばん末っ子であつた。一八三二年、母がとつぜん病のため急死し、そのあとを追うように父も翌年の夏、馬車の事故がもとで逝つた。

このように両親が相ついで亡くなつたことにより、三人の子どもたちは、当時パーミンガムに住んでいた叔父ジョン（退役海軍将校）にひきとられ、養育されることになつた。

叔父には六人の子どもがあつた。パークスはいとこたちとボールサムの寄宿学校にかよつた。少年時代のパークスの唯一のたのしみは、この叔父から海や艦、ネルソン提督の話聞くことであつた。

一八三七年、叔父一家に不幸が襲つた。叔父がにわかになつたからである。そのため生活は苦しくなつた。けれどパークスはパーミンガムの私立の通学学校を経て、翌年には名門校キング・エドワード・グラマースクールに入學した。時にパークスは十歳。

グラマースクールは、古典語を主教科とし、大学進学準備をする中等学校である。かれはこの学校で数年間、すぐれた学者や教師のもとで、みっちり薫陶をうけた。が、その天性の才質はまだ開花せず、どちらかといえば目立たぬ生徒であつた。

一八四一年（十三歳）、パークスは清国にいる二人の姉に招かれ、イギリスをあとにした。姉たちは、従妹が有名な言語学者で牧師のチャールズ・ギュッツラフ師の妻であつたので、そこに身をよせていた。

同年十月、マカオに着くと、中国語の勉強に専念するようになり、やがてその語学をもって外交官を志すようになった。翌年五月、ロバート・モリソン（イギリス全権特使ヘンリー・ポッティンジャー卿の書記官、通訳）のもとで働くようになり、八月南京条約の調印式に立ちあった。当時、かれの中国語の力は、まだじゅうぶんとはいえなかったが、それでも重宝がられ、上役からかわいがられた。

一八四三年（十五歳）、九月、広東（カントン）のイギリス領事館に勤務するようになったのを皮切りに、以後通訳官として厦門（アモイ）、福州、上海の各領事館につとめた。

一八五四年（二十六歳）、五月、厦門駐在イギリス領事に昇進した。その二年後の一八五六年一月一日トーマス・ブルマー（祖父ブルマーは記録長官）の五女ファニー・ハナとイギリスにおいて結婚した。

一八五六年から二カ年間に、広東領事代理をつとめ、この間中国側と困難な外交戦を演じた。一八五九年（三十一歳）上海領事に転進し、翌年七月エルギン卿の北京攻略戦に加わり、通訳官をつとめた。八月太沽砲台を占領後、同僚のトマス・F・ウェイドと天津において講和交渉をおこない、ほぼ妥結して帰る途中の九月十八日、清国側の奸計にはまり、フランスの交渉団とともに捕えられ、北京に送られた。

パークスは十一日間、鎖でつながれ、拷問などを受けたのち、死刑を宣告された。が、やがて釈放された。一八六二年（三十四歳）、一月、賜暇をえて帰国。五月にはバス勲位二等勲爵士となった。

一八六五年（三十七歳）、三月、初代駐日特命全権公使兼総領事R・オールコック卿の後任に任命され、同年六月二十五日長崎に来航し、七月十八日（慶応元年閏5・26）横浜に到着した。⁽¹⁾

これより一八八三（明治十六）年八月に離日するまで足掛け十八年間に、日本に在任した。もっともこの間二度ほど、本国に一時帰国している。

来日してしばらく、パークスは横浜の公使館（現・グラントホテルの地）の隣家でくらし、そのご江戸に移った。当時の江戸の公使館は、大中寺だいぢゆうじに置かれていた。この寺は前の公使館東禅寺よりも町の中心にちかく、便利な場所にあったが、部屋の数はずくない上に暗く、パークスの家族および館員が住むには、手狭であった。

のちそれを解消するために、高輪泉岳寺の前に家屋が新築され、そこにイギリス公使館をおいた。ふたたび攘夷派の討入りや放火にあってはたまらぬとの配慮から、「イギリス公使館」とは呼ばず、単に「接遇所」と名づけられた。

この建物は、「がたがた」の安普請の二棟からなり、ひとつは公使の居館にあてられ、もう一つは館員の宿所になっていた。高い黒板塀にかこまれ、外から見るとまるで牢獄のようでもあったという。建てつけが悪い上に、暖炉の設備はなく、すき間風は入ってくるし、冬場は寒さに苦しめられた。⁽²⁾

維新後、イギリス公使館は、三田台町の上野沼田藩の下屋敷に移り、さらに一八七一（明治四）年春、半蔵門外麴町一丁目堀端に土地を求め、一八七五（明治八）年移転し、現在にいたっている。また横浜山手には公使公邸があり、パークスは長年にわたって、江戸（東京）とを往復する、二重生活を送った。⁽³⁾

ともあれ、江戸の任地には、パークスの下に、

シドニー・ロコック……………一等書記官

A・B・F・ミットフォード……………二等書記官

リチャード・ユステン……………同右（のち代理領事として箱館に勤務）

ジョン・マクドナルド……………第一補助官、会計官

ウィリアム・ウイリス……………第一補助官、医師

アレクサンダー・フォン・シーボルト……………日本語通訳

W・G・アストン……………通訳見習生

H・S・ウィルキンソン……………”

アーネスト・サトウ……………”

O・A・ヴァイダル……………”
(4)

らがおり、またV・J・アプリンとブラッドショーの両中尉、ロバート・ダルシー（不詳）らが公使館の警備を担当していた。

着任以来、パークスは幕府を相手に強硬対日政策を推しすすめる一方、早くから薩長にも接近し、慶応四年の朝廷による討幕のごきが進むなか、各国とともに幕府に対して局外中立を守った。が、その裏面において活躍したのはパークスであった。

幕府崩壊後、いちはやく新政府を承認し、その後は列強の外交団の中心的人物として、明治政府を相手に威かくや恫喝をもって、たびたび政府に圧力をくわえるといった外交を展開した。

が、わが国の文明開化にも一役買い、ヨーロッパ文物の輸入にもつとめた。財政の整理、貨幣の鑄造、公債の募集、鉄道の敷設、灯台の建設などを奨励し、新文明の誘導者となった。

このようにパークスが、日本人を啓発指導して、文化の域にまで進ませ、その工業や貿易を発展させようとしたのは、イギリスの利益にもつなげると考えたからである。その態度において、姑が新婦をしかり責めるようなところがあり、人から嫌われたが、その地位を利用して私利をはかるようなことはなかった（林 董「パークスは公正なり」

『後は昔の記』所収）。

パークスは日本在任中、「我国人に悪まれたれども、北京に転任の後に至りて、頗る追慕せらるる所となれり」と

いうことだが、たびたび命をねらわれることもあったようだ。

一八六八年(四十歳)、三月二十三日(2・30)明治帝の謁見をうけるため、参内途中、京都市街において凶徒の襲撃をうけた。このとき護衛の騎兵九名は傷をうけ、そのうちの二名は重傷であった。さいわいパークスは、馬を斬られるだけですんだ。かれは謁見をみあわせ、大坂に引きかえした。(慶応4・3・7『中外新聞』)。

一八七一年(四十三歳)、この年の夏から翌年二月までイギリスにもどり、岩倉使節団の接待役をつとめた。

一八七九(五十一歳)から八二年一月まで、本国ですごした。この間に妻ファニー・ハナは病死し、また条約改正問題ではいろいろ助言を行なったが、日本の非欧化、行政と法の不整備などを理由に、日本政府の企図を挫折させた。一八八二年、聖ミカエル・聖ジョージ勲位をうけた。

一八八三年(五十五歳)、七月、むかしの同僚トマス・P・ウェイドの後任として、北京駐在イギリス特命全権公使に任じられ、清国に転任することになり、八月末に日本を去った。

翌年、朝鮮駐在全権公使を兼務。

一八八五年(五十七歳)、三月二十二日、過労とストレス、熱病などにより数日床にふせたのち、死去。葬儀のあと遺体は、蒸気船にのせられ本国に運ばれた。遺体がロンドンに着くと、ケンジングトンの聖メアリー・アボット教会で追悼式がおこなわれ、同年六月二十六日ロンドン郊外にある聖ローレンス・ホイットチャーチに葬られた。

一八八七年、聖ポール寺院において、ささやかな記念式典(パークスの胸像の除幕式)がもよおされ、元駐日公使のオルコックも参列した。

このようにパークスは、幼いころに両親をなくし、叔父夫妻に養育され、中等教育を受けただけで、大学の課程をふむ機会を逸してしまっただが、実地に中国語を学んだことを契機として、外交事務官から身をおこし、やがて通訳官

となり、ついには特命全権公使といった、外交官としてはもっとも高い地位についた。このように異例の出世をとげたのは、その才識によるところが大きいのが、職務にたいして実直であり、私利にうすかったからであろう。

その死が麹町のイギリス公使館に電報をもって知らされたのは、明治十八（一八八五）年三月二十二日の夜八時すぎのことであった（3・25『時事』）。

その訃音をきいて、時の井上外務卿は、ロンドン駐在の河瀬真孝公使にたいして、左記のような訓電をうった。

余は足下に対して駐清英国女王陛下の特命全権公使ソル・ハルリー・エス・パークス君が不時急卒の卒去（死）に就き、余が深き痛悼の情を英国外務卿グラウケル（L・S・グランヴィル一八一五〜九一）伯閣下に対して面陳（会って直接にいう）し、且又同伯に対して、我が日本政府は斯くも我国文明開化の進歩興りて最も力あり、且は其の久しく我国に駐在せられて朝廷官吏の間に斯くも多くの親友を得られたる人の卒去に就きては、只だ痛悼を感じるの外なき事を面陳あるべき旨を訓令す。

三月廿五日

東京に於て

外務卿伯爵 井上 馨

英国倫敦府駐在特命全権公使

河瀬真孝足下

林董（二八五〇〜一九一三、明治期の外交官）によると、日本にいたころのパークスは、「飛ぶ鳥も落る勢」であったので、本国においてもさぞかし威勢がよいのであろう、と日本の外交官はおもっていたらしい。

ところが岩倉使節が条約改正問題でグランヴィル外相と談判したとき、パークスは末席につき、外相の発言の間を待ってわずかに口をはさむ程度であった。またパークスを呼ぶときも、「サー」（卿）をつけず、「ミスター、パーク

ス」と呼んでいた。

その場にいた林(当時、書記官)は、パークスの真正の位階姓名を外相がよく知っていないようでは、この人物はそれほどの大物ではあるまい、とおもった。かえって楽屋裏がよくわかり、パークスも大いに器量を下げたということである(「本国に於けるパークス」)。

わたしはこの稿を書くにあたり、邦人によるパークス伝があるかどうか捜してみたが、人名辞典の類に小さな記事が散見するぐらいで、真に小伝といえるものすら無いにひとしいことを知った。あえて伝記と呼べるものに、明治三十年代に『史談会速記録』に四回にわたって連載された「故英国公使巴[屈斯氏伝記](寺師宗徳)」というものがあるが、これはスタンレー・レインリーブールとF・ヴィクター・ディキンスの共著『ハリー・パークス卿伝』(Stanley Lane-Pool and F. Victor Dickens: *The Life of Sir Harry Parkes*, 2 vols. Macmillan and Co. London. 1894)を下敷にして書いたものである。ついで『史学雑誌』(第九編第一号)に掲載された「サー・ハリー・パークスの伝記」(吉国藤吉)は、いま述べたイギリス人の手になる伝記の中味の概要を紹介したものである。この中には、パークスその人の閱歴にすこしふれた部分がある。

また昭和初期に法学博士・信夫淳平しのぼが執筆した「明治の外交史上に於けるパークスの位地」(一)〜(四)〔『国際法外交雑誌』昭和3・9〜同4・2〕は、主に日本におけるパークスの政治活動と事蹟について叙述したのだが、逸話や奇談にも言及している。

日本におけるパークスの事蹟——イギリス側から見た幕末から明治期にかけての外交史については、先にのべた『ハリー・パークス卿伝』の第三卷(F. D. Dickens: *The Life of Harry Parkes, China & Japan vol. II Minister Plenipotentiary, Macmillan and Co. 1894*)の「さざ」主として日本に關係した部分 XXII から XXXIX までを抜

いて訳出した『パークス伝 日本駐在の日々——F・V・ディキンス 高梨健吉訳 東洋文庫 平凡社』がある。

これには訳者による、パークスの略年譜、原著者ディキンスのこと、パークス卿伝についての短い解説がついている。

さて、パークスの経歴の概略は、以上のべた通りであるが、プールとディキンスの共著『ハリー・パークス卿伝』にもふれられていない、またわが国の史家がこれまでに言及することがなかったパークスの墓碑、記念碑、胸像などについて述べてみたい。

パークスの埋葬に関しては、『ハリー・パークス卿伝』に、

ハリー・パークス卿は、小さな教会の静かな墓地において、妻のかたわらに葬られた。その教会は、この夫婦が三十年ほど前に結婚式をあげたところである。ホウィットチャーチ (Whitchurch) はかれらが一体となったのを目撃した。死はふたりを分かつことはなかった (*Life of Harry Parkes, vol. II, P. 430*)。

とある。

また、「ホウィットチャーチ」の名が出てくるくぐりに、つぎのようなものがある。

はじめて出会って六週間後、パークスとファニー・ブルマーは、一八五六年一月一日ホウィットチャーチのかの有名な礼拝堂で結婚式をあげた。ヘンデルがシャンドス公のためにたびたびオルガンを弾いた所である (*Life of Harry Parkes, vol. I, p. 198*)。

わたしの墓さがしは、この「ホウィットチャーチ」なるものを捜すことからはじめた。が、はじめこれは教会名

なのか、それとも地名なのか、よくわからなかった。けれどいろいろ調べた結果、やはり教会名であることを知った。その手がかりを最初にあたえてくれたのは、ベン・ウェインレゴ、クリストファー・ヒーバート共編『ロンドン百科辞典』(*The London Encyclopaedia*, Macmillan, 1983)である。その中の記述に、

一七一〇年、リトル・スタンモアの邸宅は、のちのシャンドス公であるジェイムズ・ブリジズにゆずり渡された。若いころブリジズは軍の主計総監となり、かなりの財をたくわえ、その一部を「ギヤノンス」と呼ばれた邸宅に使った。また十六世紀に建てられた聖ローレンス・ホイットチャーチの改築に使われた。大邸宅のほうはじきに取りこわされたが、教会はいまも使われており、ユニークな建物である(七一九頁)。

といったものがある。

この一文により、「ホイットチャーチ」の正式名が、「聖ローレンス・ホイットチャーチ」であることが判明した。が、問題はそれがどこにあるのかということである。土地感のない、われわれ日本人にとって、外国で実地に場所や建物をさがし出すことは容易ではない。が、カール・ベディカーの一連の旅行者ガイド・ブック便覧などは、やはり必須の文献といえようか。わたしなどは、多年これを各国別にあつめ、つねに座右に置いて参考にしている。年代的には、やや新しい刊本だが、ベディカーの『ロンドン近郊』(*K. Baedeker: London and its Environs, 1923*)に、

およそ一マイル半ほど西にゆくと、G・N・Rの支線の駅、エッジウェアがある。この駅に近接しているのが、ホイットモアまたはリトル・スタンモアである。その近くにすばらしい大邸宅「ギヤノンス」がある。これはシャンドス公が、一七一五年から一七二〇年にかけて、二十五万ポンド使って建てたものだが、一七四七年に取りこわされた。ヘンデルは、一七一八年から二一年にかけ

て、聖ローレンス教会において、同公爵の聖歌隊指揮者兼オルガン奏者をつとめた（四五七頁）。

といった記述がみられる。

わたしはこれら二つの記述を手がかりに、ロンドン滞在中の某日、地図・カメラ・ノートをもって、ひとまず地下鉄ピカデリー線の終点エッジウェア (Edgware) 駅までゆくことにした。そこまでは、ロンドンの中心から約四、五十分位の行程である。

エッジウェアは、いまは郊外の住宅地といった所で、駅周辺には商店がっらなっている。駅の外にでるや、わたしはステーション・ロードを左にまっすぐ歩きだした。十分も歩いたらうか、聖マーガレット教会という小さな教会があったので、その境内に入り、一時間ほど古い墓の碑文をひとつひとつ読んだのち、ふたたび歩きだした。

途中、何度か通行人をつかまえ、「ホイットチャーチ」という教会を知らないか、たずねた。が、知らない、という答がむなしく返ってくる。やがて知っている、という者が現われ、ホイットモア通りをまっすぐ行けという。歩いているうちに、並木のある通りにさしかかった。その通りの両側に人家が、間隔をおいて建っている。知らぬ土地を、一人に道をたずねながら歩くことの不安は、ことばでいい尽くせぬ。

ようやく石壁と教会らしい建物がみえてきた。エッジウェア駅から大人の足で二、三十分ぐらいの所である。木製の門があり、そのわきに St. Lawrence Church の看板がみえた。その日はちょうど日曜日にあたっていた。建物のほうから、オルガンの音にあわせて歌声がきこえてくる。礼拝がおわるのを待って、牧師にパークスの墓の所在をたずねてみることにした。

勤行がおわるまでの間、教会の建物のまわりに無数にみられる墓碑に、パークスの名がないか、さがしてみたが、

みつからない。ひょっとしてこの教会ではないのかも知れぬ、といった不安が心をよぎる。

礼拝がおわった。牧師は建物の入口のところで、会衆をひとりひとり送りだしている。かれらはこれから別棟（集会所）に行き、そこで紅茶を飲みながら会話をたのしむのである。牧師をつかまえ、パークス卿の墓をさがしに来た、といったら、老いた監理人^{ツォーナー}を紹介してくれた。

集会所でお茶をこちそうになった。監理人は、パークス卿のことを知っている、その記念碑が教会のなかにある、ともいった。そのことばに勇気づけられ、はるばるここまで歩いてきた苦勞など、いっぺんに吹きとんでしまった。わたしはこれまで海外においてたびたび実地踏査をおこなってきたが、どういうわけかたいがい幸運にめぐまれるのである。やがて先ほどの牧師がやって来たので、その案内をうけ、教会内に入ることにした。

聖ローレンス教会があるリトル・スタンモアの教区は、そのむかし樹木がうっそうと茂った、のどかな田園地帯であった。が、一九二〇年から三〇年代にかけて、地下鉄の路線がエッジウェアまで伸びるにおよんで、この教区はすっかり近代化の波におし流され、郊外の住宅地^{ノブヒル}となった。

教会の敷地は二エーカーある。教会の建物は石づくりである。十五世紀につくられたというチューター様式（後期垂直様式）の塔（図版Ⅰ）⁽⁷⁾がついている。建物はけっして大きくはない。内陣の祭壇のまはは会衆席^{ヒュー}。祭壇のうえの天井にルイ・ラゲールの作と伝えられる「エホバの祈り」の大きなフレスコ画が描かれている。

入口を入ってすぐ右手の壁に、大きな大理石の石板がいくつもうめ込まれており、パークスの義父トマス・ホール・ブルマーの次男チャールズ・ジョージ・ブルマー（一八五六—一九一四）の記念碑がみられる。

さらにブルマーの四女ジュリア・マリア（ジョージ・レイサン・トンブソン中佐夫人）の記念碑の下に、パークスの妻ファニー・ハナのものが目にとまった。つぎに引く碑文がそれである。

SACRED TO THE MEMORY OF
FANNY HANNAH,
THE DEARLY BELOVED WIFE OF
SIR HARRY S. PARKES, K. C. B. H.M.: MINISTER TO JAPAN
AND THE FIFTH DAUGHTER OF
THOMAS HALL PLUMER, ESQUIRE, FORMERLY OF CANONS,
WHO AFTER LONG DEVOTION TO RESPONSIBLE DUTIES
IN CHINA AND JAPAN,
ENTERED INTO HER REST ON THE 12TH NOVEMBER 1879,
UNIVERSALLY LAMENTED BY THE COMMUNITIES AMONG
WHOM SHE HAD RESIDED,
AND LEAVING TO HER SORROWING HUSBAND AND CHILDREN
A BRIGHT EXAMPLE OF CHRISTIAN TRUST AND FORTITUDE,
AND OF LOVING AND UNWEARIED LABOUR IN THE CAUSE OF OTHERS
AGED 47 YEARS.
"THEN ARE THEY GLAD BECAUSE THEY ARE AT REST, AND SO HE
BRINGTH THEM UNTO THE HAVEN WHERE THEY WOULD BE" [.....]

(大意)

駐日公使ハリリー・S・パークス卿の最愛の妻フアンナー・ハンナの想いでのためだ。

彼女はもと大聖堂参事会員トマス・ホール・ブルマー氏の五女であり、清国および日本において、責任ある仕事にながく献身したのち、一八七九年十一月十二日永眠した。その死は、彼女が暮らした社会のあらゆる人びとから惜しまれ、また悲しむ夫と子どもたちにキリスト教徒としての義務と不屈の精神、人のためなら愛と労をおし、うむことなく奉仕するといった輝かしい実例をしめした。享年四十七歳。

かれらは休んでいることを喜んでゐるなら、神はかれらがのぞむ、安慮の地につれてゆくだろう。

またパークスの記念碑（金属板）は、祭壇そばの右手の窓ぎわにある。すなわち、——

IN LOVING MEMORY OF

HARRY SMITH PARKES, G. C. M. G., K. C. B.,

HER MAJESTY'S MINISTER PLENIPOTENTIARY

TO CHINA AND JAPAN,

WHO DIED AT PEKING, 22ND MARCH 1885, AGED 57.

AND WHOSE BODY RESTS IN THE FAMILY VAULT ADJOINING THIS CHURCH,

THUS EARLY, HE FELL AT THE POST OF HONOUR AND DUTY,

AFTER A LIFELONG AND UNTIRING DEVOTION

TO THE SERVICE OF HIS COUNTRY, UNIVERSALLY BELOVED

AND MOURNED, HIS UNTIMELY REMOVAL AT A CRITICAL

PERIOD WAS TO ALL CLASSES OF THE COMMUNITY IN THE

EAST, THE SCENE OF HIS LABOURS FOR 45 YEARS, A

SERIOUS CALAMITY AND TO HIS COUNTRYMEN A NATIONAL LOSS.

"Art thou weary, art thou languid" art

thou sore distressed?

"Come to Me" saith one "and coming, be at rest."

THIS TABLET WAS ERECTED BY HIS SORROWING CHILDREN. (図版II)

(大意)

女王陛下の清国および日本駐在特命全權公使ハリ・S・パークスの愛すべき想いでのために。

同氏は一八八五年三月二十二日、北京において死去。享年五十七歳。その遺骸は、この教会に隣接するパークス家の墓所で安んでいる。生涯にわたって、たゆまず國家のために献身したのち、若くして名替と義務がある地位を果たす最中にたおれた。かれは万人から愛され、かつその死はいたまれた。重大な時局にあたって、若死したことは、かれが四十五年にわたって難事に取りくんだ東洋のあらゆる社会の階層のひとびとにとっては、大きな不幸であり、また同胞にとっては国家的損失である。

「汝はつかれ、ものういのか。汝はひどく悲しんでいるのか？」

「わがもとに来るがよい、来たらよく休むがよい、と、主はいわれた。」

この記念碑は、悲しんでいる子どもたちが建てたものである。

さてつぎに肝心のパークスの墓について述べてみたい。この教会の記録は厳重に監理されており、関係者以外、たれも見ることができない。わたしは老監理人に案内されて、記録保管室に連れてゆかれたが、中には入れてもらえなかった。

老監理人だけが、パークスの墓の墓の位置を確認するため、部屋の中に入った。やがてわたしは、部屋から出てきた老人といっしょに墓にむかった。パークスの墓は、教会の塔から三、四十メートルほど離れた所——木の茂みにかくれるようにして建っている。

墓は大理石でできた大きな十字架である（図版Ⅲ）。三段の台石のうえにのっており、前方に三十度ほど傾いている。正面の台座のところに、

IN
LOVING MEMORY
OF
SIR HARRY SMITH PARKES
G. C. M. G. K. C. B
DIED 22ND MARCH 1885
AND OF HIS WIFE
ANNY HANNA PARKES
DIED 18TH NOV. 1879

（大意）

バス勲位二等勲爵士、聖ミカエル・聖ジョージ勲位を授与されたハリ・スミス・パークス卿（一八八五年三月二十二日死去）とその妻アニー・ハナ・パークス（一八七九年十一月十八日死去）の想いでのために。

といった文字が、かすかに読みとれる。刻字はかなり摩滅しており、これでは簡単に墓を見つけ出すことはできぬはずである。

この合碑は、パークスが亡くなったとき、子供たちが建てたものである。

パークスの胸像（大理石）は、ロンドンの聖ポール寺院の地下室に、大勢の名士たちのそれとともに安置されている〔図版Ⅳ〕。が、地下室は非公開であり、中に入るには許可がいる。

幕末から維新期にかけて、わが国にやって来た外交官は数多いが、パークスはとりわけ激動の時代を日本人とともに生き、かれらと深いかわりを持ち、またわが国のその後の発展を直接目のあたりにしたひとりであった。人間の魅力には、いまひとつ欠けるが、わが国の近代史に大きな足跡を残したことは否めない。

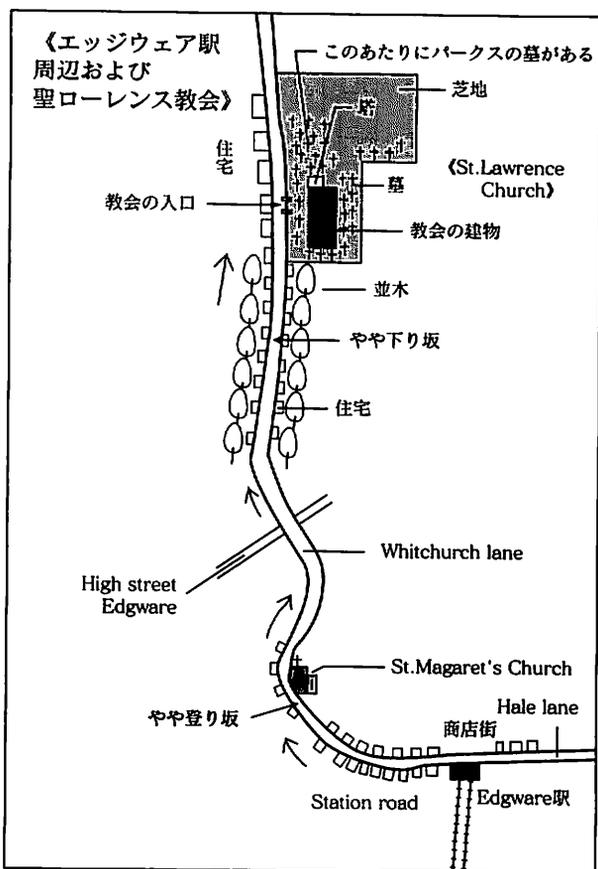
パークスに興味をおぼえ、その葬域えいゐにおいて、墓を発見できたことは、大きなよろこびであった。当初、駐日フランス公使レオン・ロッシュの墓についても述べるつもりであったが、またの機会にしたい。

注

- (1) Stanley Lane-Pool and F. Victor Dickens: The Life of Sir Harry Parkes, 2 vols. Macmillan and Co, London, 1894 年。George Smith 編 The Dictionary of National Biography, Oxford Univ. Press, London を参照。
- (2) アーネスト・サトウ原著「外交官の見た明治維新 上」(岩波書店、昭和五〇年) 一三三、一〇四、一〇五頁。坂田精一訳。
- (3) 川崎晴郎「幕末の駐日外交官・領事官」(雄松堂出版、昭和六三年三月)、一五八―一五九頁。
- (4) 注(2) および注(3) を参照。
- (5) 「サー・ハリ－・パークスの伝記」(『史学雑誌』第九編第一号) を参照。
- (6) 注(1) に同じ。

(7) **St Lawrence Whichurch Little Stannore, A Short Guide 1985** 

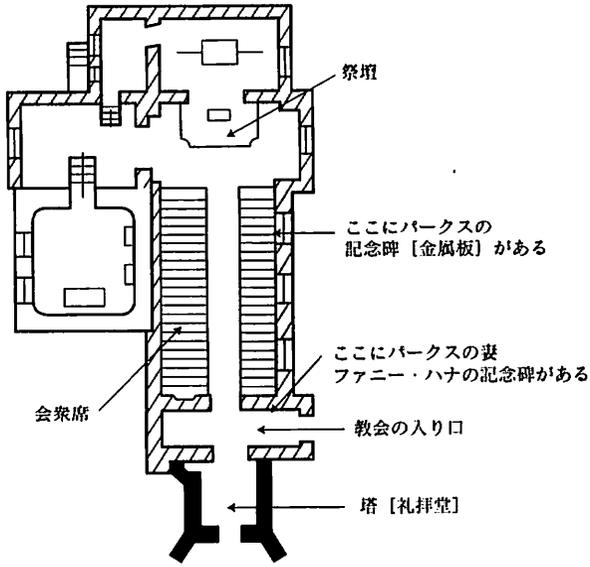
駐日公使ハリ－・S・パークスの墓



【地図 I】

(筆者作図)

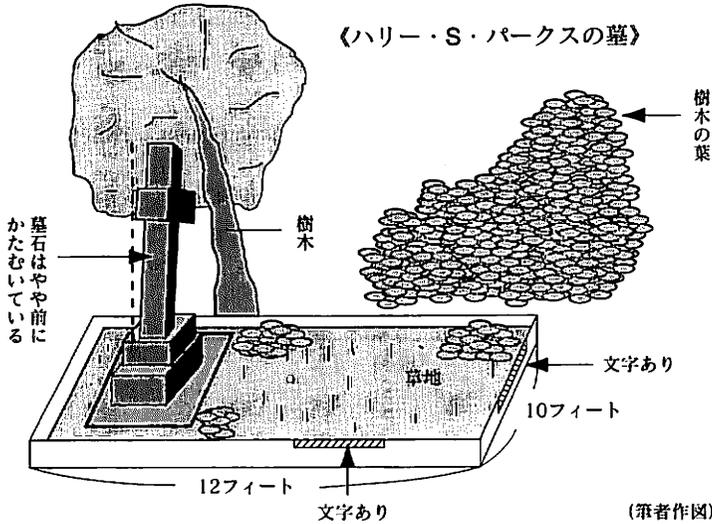
《聖ローレンス教会の内部》



[平面図]

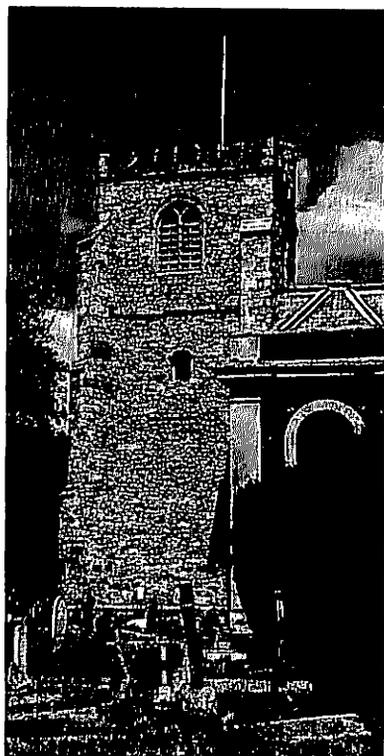
(筆者作図)

《ハリー・S・パークスの墓》



(筆者作図)

駐日公使ハリー・S・パークスの墓



パークスが眠る「聖ローレンス・ホウィットチャーチ」
(筆者撮影)



教会内にあるパークスの記念碑 [金属板] (筆者撮影)



ロンドンの聖ポール寺院の地下室にある
パークスの胸像 (筆者撮影)



パークスの墓 (筆者撮影)